

KOBEの本棚

—神戸ふるさと文庫だより—

第107号 令和6年(2024年)7月20日

編集・発行 神戸市立中央図書館

〒650-0017 神戸市中央区楠町7-2-1

TEL : (078)371-3351 FAX : (078)371-5046

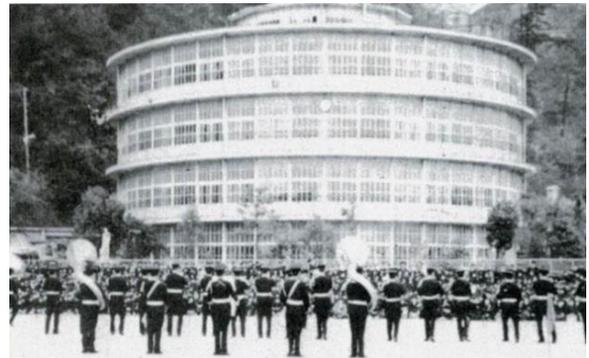


↑現在の新神戸駅 (2024年6月撮影)



↑新神戸駅東端トンネルの上に移転した布引中学校

(2024年6月撮影)



↑円形校舎が特徴的な移転前の布引中学校

『創立五十周年記念誌 翔べ清瀧の子よ』

(神戸市立布引中学校) より転載

新神戸駅

いまから六十年前の昭和三十九年に東海道新幹線が開業。昭和四十七年には新大阪―岡山間で山陽新幹線が開通し、新神戸駅が開業します。

山陽新幹線の建設にあたって、神戸周辺は山間部が多いため、ルートと駅の設置場所の策定は難しいものでした。三田市から小野市を通過する「背山案」、神戸市北区から三木市を通過する「中央案」、六甲山系南斜面にトンネルを通す「表六甲案」の三案から、トンネル工事の困難さはあるものの、市街地へのアクセスが良く経済的効果が見込める「表六甲案」が採用されました。このルートでは在来線の駅に新幹線駅を併設することが難しく、葺合区(現・中央区)布引の六甲トンネルと神戸トンネルの間、約五〇〇メートルの狭小地に新神戸駅を設置することになりました。

同駅設置のため、布引の滝の入口(現在の駅西側)にあった布引中学校は昭和四十三年に駅東側の高台に移転。五階建の新校舎の眼下には、市街地と港が広がっています。

六甲山の緑を背に建つスマートな白い駅舎。新神戸駅は神戸の新しい玄関口として歓迎されました。

参考…『山陽新幹線新大阪岡山間建設工事誌』『葺合ものがたり』ほか

ソーシャルビジネスで拓く多文化社会
多言語センターFACIL編
(明石書店)

多言語センターFACILは、阪神・淡路大震災をきっかけに神戸で誕生した。翻訳・通訳を軸に多言語・多文化関連のニーズに応えるNPO法人である。本書は、従来ボランティアが多かった翻訳や通訳を、コミュニケーションビジネスとして展開するために挑戦し続けてきた二四年間の活動記録である。地域住民である外国人への通訳の重要性を説き、ひたむきに活動するFACILの信念が胸を打つ。

少数言語の翻訳に挑戦した話や団体名に込めた思いなど、各メンバーが書いたコラムも興味深い。



ポートピア花壇捜索隊 No. 1
Towers著・発行

白地にマリンブルーのライン、「ポートピア」の文字が入った花壇は、一九八一年開催のポートピア博覧会のもの。千個以上作られ、会期終了後は神戸市に九〇〇個、兵庫県内にも配られた。今も残っている花壇を探し、場所・個数・状態を記録、写真とメモを添えた。小さな事柄も大切にし、面白がる著者の人柄が伝わる。今回一〇九個掲載。博覧会のパビリオンやグッズも紹介され懐かしい。

神戸とジャズ100年 神戸新聞文化部編 (神戸新聞総合出版センター)

大正十二年四月、日本初のプロジャズバンド「ラフィング・スターズ」が神戸のホテルで演奏した。神戸ジャズ誕生一〇〇年にちなみ神戸新聞では「神戸JAZZの魂 響いて100年」を連載。本書はその書籍化である。

ピアノの小曾根真、クラリネットの北村英治らトッププレイヤーのジャズへの思いやエピソードのほか、長年に渡ってジャズの振興に力を注ぎ続ける人々や未来を担う若者たちの奮闘を伝える。

林芳樹の「正平調」神戸新聞1面コラム傑作選 神戸新聞社論説委員室編 (神戸新聞総合出版センター)

「正平調」は昭和九年から続く神戸新聞の看板コラム。重大事件から身近な暮らしの話題まで幅広いテーマを扱う。執筆者らの人柄を感じる文章に共感を覚えた読者も多いのではないだろうか。林芳樹は、主に社会部で勤務し、編集局長を経て特別編集委員兼論説顧問に就任するなど新聞社の中核を担ったベテラン記者。執筆した中から一二三本を厳選、収録する。

繭の中の街 宇野碧 (双葉社)

神戸市出身の著者による七編の短編小説集。神戸の街で繰り広げられる多様な出会いと別れを描く。異人館のチケット売り場でアルバイトをしている予備校生と、繭のような部屋に住む男性との恋を描いた「エデンの102号室」、小学生の女の子と神様を名乗る男の子とのやり取りが軽快な「秋の午後、神様と」、港湾で働く男性が翼を持つ異種族と出会う「プロファイル」等。街並みが目に浮かぶ繊細な描写と、作品ごとに異なる味わいに惹きつけられる。

明治の海を照らす 灯台とお雇い外国人ブラントン 稲生淳 (七月社)

R・H・ブラントンは、明治元年に来日したスコットランド出身の政府のお雇い外国人である。明治九年に帰国するまでに日本沿岸に二六基の灯台を建設した。その中には、現在は須磨海浜公園に移設された和田岬灯台も含まれる。さらに横浜のまちづくりに関わったり、鉄道建設への提言を行うなど、日本の近代化にも貢献した。

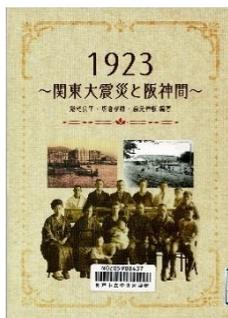
本書は、日本における灯台建設の歴史をたどる第一部と、ブラントンによる灯台建設の経緯などを解説した第二部、著者がブラントンの故郷を訪ねた記録の第三部からなる。



羊は大空を翔ける 川西清兵衛を巡って

原田昌紀 碓紀夫（文芸社）
本書は、新明和工業株式会社の創業一〇〇周年を記念して、創業者・川西清兵衛をはじめとする関係者の活動に焦点を当て、同社の歩みをまとめたものである。

清兵衛がまず手掛けた日本毛織（ニッケ）創業のきっかけは、彼が神戸港棧橋を散歩中に見つけた羊毛屑にあるのだという。大正九年には、川崎町（現・兵庫区）の川西機械製作所に飛行機部を設置、日本における航空機の製造のパイオニアとなった。後に川西航空機となり、現在の新明和工業に至る。印象的なエピソードを盛り込みつつ、今に続くグループ各社の事業を追っていく。



1923 関東大震災と阪神間 海老良平 坂倉孝雄 森元伸枝編（神戸新聞総合出版センター）

大正十二年九月一日、首都圏を襲った未曾有の大災害が阪神間にもたらしたものを専門家がそれぞれ視点からまとめる。例えば、神戸の洋菓子文化の始まりはカール・ユーハイムなど外国人菓子職人が関東大震災により神戸に避難して来て礎を築いたことによる。

その他、震災報道、外国人コミュニティ、神戸港と生糸、建築スポーツ、娯楽レジャーのテーマを関東大震災以前から連続して描くことで、その影響を明らかにしていく。阪神間の一〇〇年を振り返る上でも興味深い一冊である。

|| その他の新刊 ||

共に明るい 井戸川射子（講談社）
疎開生活壹ケ年のあしあと 昭和二十年九月一日、朝来郡竹田分教場神戸市須佐校 「疎開生活壹ケ年のあしあと」 文集編集委員会（日本機関紙出版センター）

神戸 その30 あんな人こんな人

石上* 玄一郎 いそのかみ・げんいちろう 作家 明治43年(1910) ~ 平成21年(2009)



石上玄一郎(本名・上田重彦)は北海道に生まれました。幼少時に両親を失い、父の郷里岩手県で祖母に育てられました。大正12年旧制盛岡中学校に入学し、図書館で文学書を読みふけたといいます。昭和2年旧制弘前高等学校文科に入学。同窓の太宰治と知り合いました。在学中から『校友会雑誌』に短編小説を次々と発表し、上京後の昭和14年、石上玄一郎の筆名で発表したデビュー作「針」が激賞されます。さらに『中央公論』に発表した「絵姿」を収録した処女作品集が刊行となり、作家としての地位を築き始めました。昭和17年32歳で発表した「精神病学教室」によって厭戦主義者とみなされ、上海に逃れますが、戦後は帰国して「自殺案内者」など数多くの小説作品を発表しました。文芸評論家・奥野健男は「戦中、戦後の日本文学を考えると、石上玄一郎の存在は重く大きい…地下深く流れる暗流のごとく人々に影響し続けている」と述し、司馬遼太郎は「陽炎のような土俗の上に思いきって知的な空中楼阁が建っている」と作品を評しています。昭和30年石上は大阪成蹊女子短期大学に招かれ、住居を神戸市東灘区に移します。小説にとどまらず、『彷徨えるユダヤ人』『輪廻と転生』などユダヤ人論や仏教思想など多様な作品を世に出すかわら、市民文芸集の選考や文学講座の講師を務めるなど、市民と関わることを大切にしました。昭和52年に神戸市文化賞を受賞。また、昭和61年に出版した『太宰治と私-激浪の青春』では、あらためて若いころの交わりが注目を集めました。晩年も精力的に講演や執筆を続け、99歳で亡くなる直前までの50年余り、神戸を離れることはありませんでした。

【参考】『関西文学 第11巻第8号 石上玄一郎特集』（関西文学の会、1973）、奥野健男『素顔の作家たち』（集英社、1978）ほか

【参考・写真】『石上玄一郎小説作品集 第3巻』（未知谷、2008）

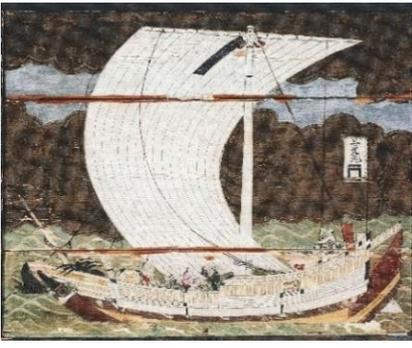
*筆名は仏教で修行を示す「樹下石上」から付けられた。ヨミは、昭和56年頃から事典などでは「いしがみ」とも。

ランダム・ウォーク・

イン・コウベ 107

兵庫津発のイノベーション

文久三年（一八六三）二月六日、赤い半纏をまとった船乗りたちが「惣一番」と書かれた幟をなびかせながら江戸市中を練り歩き、新川（現・東京都中央区新川）の酒問屋に到着しました。撰津国御影（現・東灘区）の船頭、枅屋松三郎の船が新酒番船で一番乗りを果たしたのです。灘五郷などで醸された新酒を西宮から船に積み込み、江戸に到着するまでの速さを競った新酒番船は、年に一度の恒例行事として明治初期まで続きました。この文久三年に行われた競争では西宮から江戸までを約四日で走破しました。約一九〇年さかのぼった

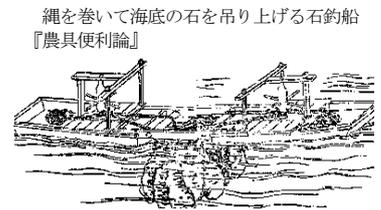


江戸時代の海運に用いられた舟才船
敏馬神社（灘区）所蔵の絵馬に描かれたもの
『神戸市指定文化財調査報告書 平成23・24年度』

延宝年間（一六七三〜一六八一）には大坂〜江戸間の航海に一〇日以上を要したとされており、より長い距離を半分以下の時間で走破した新酒番船は、かなり高速であることが分かります。延宝年間の航海も文久三年の新酒番船も用いられた船は舟才船と呼ばれる形式の帆船であることは共通しているにも関わらず、こうした高速化が実現できた要因の一つとして、帆布の改良が挙げられます。

播磨国高砂（現・兵庫県高砂市）出身で、兵庫津を拠点に活動した工業松右衛門（一七四三〜一八一二）は、天明五年（一七八五）頃、船乗りとしての経験をもとに新しい帆布の開発に取り組みました。それまでの帆布は、複数の綿布を数枚縫い合わせた刺帆と呼ばれるものが主流で、耐久性に難があり、強風下での航海では破れてしまうこともありました。これに対して松右衛門が開発した帆布は太い糸で一枚に織り上げ、頑丈で風を逃がしにくいものでした。後に「松右衛門帆」と呼ばれるようになるこの帆布は急速に普及し、全国の高速度に貢献しました。

寛政四年（一七九二）に松右衛門が兵庫津の佐比江新地（現・兵庫区佐比江町）に開店した廻船問屋「御影屋松



縄を巻いて海底の石を吊り上げる石釣船
『農具便利論』

右衛門」は、廻船業と帆布製造の他、港湾の工事も行うようになり、海底の石を移動させる石釣船や、土砂を取り除く工事に用いる底捲船などを考案しました。

二、帝政ロシアによる南下政策を警戒していた幕府は北方の開発を計画し、船や港の専門家として松右衛門に白羽の矢を立て、蝦夷地（北海道）築港の命を下します。それを受けた松右衛門は、択捉島での船着場の造成や、箱館（現・北海道函館市）での船塲場（船の補修を行うドック）の建設などを行いました。それ以降も北前船の寄港地をはじめ全国各地で港湾工事を行い、それらの事業は帆布の開発と並んで海運業の発展に寄与しました。松右衛門の死後、兵庫津



兵庫区の八王寺に建つ工業松右衛門の頭影碑は、巻いた帆布をかたどっている。

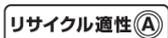
の海運関係者によって嘉永六年（一八五三）に建てられた頭影碑は、今も八王寺（兵庫区羽坂通）の境内に残っています。

松右衛門帆が開発された天明年間（一七八一〜一七八九）頃の兵庫津では、鍛冶屋町（現・兵庫区鍛冶屋町）の豪商・北風荘右衛門貞幹（一七三六〜一八〇二）が大きな存在感を示していました。『北風遺事』には「荷主船頭の気請（気持ち）大切と云ふ事北風の標語なり」と述べられていて、北風家が船乗りたちに無料で宿や飲食を提供することで兵庫津への寄港を促したことが知られています。また、松右衛門のような新事業に挑戦する者への投資も行っており、松右衛門は支援を受けつつ、北風宿に集う全国の船乗りたちから航海技術に関する情報を仕入れて、帆布の開発に活かしました。

広く開かれた港に全国から多くの人と物を集め、そこから新たなものを生み出していく兵庫津の気風は、後の海港都市・神戸の礎の一つとなっていくます。

参考文献

『工業松右衛門伝…近世海事の革新者』、『江戸時代の兵庫津』、『北風遺事・残燈照古抄』、『和船1・2』（ものごと人間の文化史）シリーズ、『西宮の歴史と文化』、『日本近世交通史論集』、『帆布の今昔』ほか



この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。